

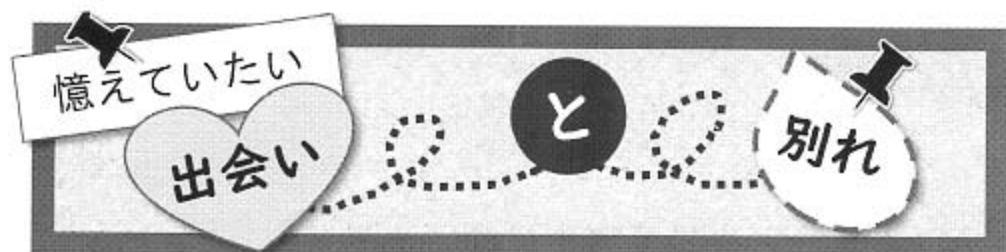
‘キャッチ’
CATCH

Vol.95



2021.3

西東京市図書館



『まってる。』（原題『Moi j' attends』）

デヴィッド・カリ 著 セルジュ・ブロック 著

こやまくんどう 訳 千倉書房

いま、「まってる。」のはコロナの終息。。。楽しみだった高校2年生の文化祭も、体育祭も部活も中止。お弁当の時間も、前を向いて無言で食べる。

この本は、我が家に景品として新聞社から送られてきました。横長の、フランス語に可愛い絵の絵本。表紙を見てときめきました。

主人公の男の子を中心にたくさんの「まってる。」が詰まっています。

人生にはたくさんの出会いが「待っている。」だから「まってる。」人生は別れもつきもの。それはとても悲しくて切ないけれど、そこで立ち止まってはいけない。この先にまだまだあらゆるものが「まってる。」ことを。だからもう一度待ってみよう笑える日を。

禍福は糾^{なぐさ}える縄^{あざな}の如し、といいますが悲しみや絶望がやってきても、いつかまた幸福な新しい未来がやってくる希望を教えてくれる本です。本の中に、赤い毛糸が描かれていますが、この糸が「絆」や「縁」を思わせてくれます。

この本と出会ったのは5年前でした。それまでは待つことが苦手でした。けれど、この本に出会ってから生きるということは待つことの繰り返しだけど「まってる。」がいいな。と思えるようになりました。まちたいひとやまちたいことがあることが幸せなんだとを感じるようになったから。

友達とおしゃべりしながら食べるお弁当の時間を「まってる。」

おじいちゃんとおばあちゃんに会える日を「まってる。」

みんなで旅行に行ける日を「まってる。」

楽しいことがいっぱい待っているから、悲しくて避けられない「まってる。」も乗り越えていける。大丈夫だよってこの本は思わせてくれます。

ぜひ一度手に取ってみて下さい。温かい贈り物をもらったような気がしますよ。

『リケイ文芸同盟』

向井湘吾 著 幻冬舎

この小説は“理系”と“文芸”の出会いの物語です。

主人公、桐生蒼太は生粋の理系人間。出版社で科学文庫の編集者をしていました。しかし、編集者になって三年たったころ、文芸編集部に異動になってしまいます。文芸とは縁遠い人間だった桐生は戸惑い、何もかもが曖昧で数値化できない文芸の世界に苛立ちすらしていきます。けれど、理系にしかない思考で、文系の人たちにも負けない本が作れるのではないかと。そして、同じく理系の友人とともに、理系的思考でベストセラーを作る「理系文芸同盟」を結成し、仕事に邁進していきます。

リケイ とタイトルに入っているだけあり、作中にはたくさん理系なものがちりばめられています。自分自身が文系なので、主人公の考え方に驚かされることもありましたが、逆に理系の人を読めば、共感できることが多いかもしれません。時々耳慣れない数学用語も出てきますが、丁寧な解説があって文系にもとてもやさしい小説です。

そして、文芸編集部で頑張っていこうと決意した桐生でしたが、データに誇張を交えたプレゼンや、曖昧なスケジュール進行などたくさんの理解できないことに直面し、慣れることもありました。その中でも、文芸好きの編集部の女の子との出会いなどで、本作りに携わる人々みんなに譲れない思いがあることを理解していきます。理系と文系、考え方は違っても、いい本を作りたいと言う思いは

分かち合えるものだったのです。

まるで異文化でもあるような理系と文芸が会ったとき、果たしてどんな本ができあがるのか？そして「理系文芸同盟」の願いはどうなるのか？理系の人も文系の人もぜひ読んでみてください！

『一〇五度』

佐藤まどか 著 あすなろ書房

皆さんは人とは反対の意見をはっきりと言えますか？批判されたらどうしよう、いじめられたらどうしよう、ましてや目上の人ならば怖くてできないと思うのではないのでしょうか。

この本の主人公、大木戸真もそのような中学生男子でした。父親に怒られないように勉強し、いじめの対象にならないようにできるだけ「個性」を消す、そんな生活を送っていました。しかし、彼には、ある趣味がありました。それは「イス」です。本人曰く、人の気配があるからだとか。そんな真は引っ越しをきっかけに中高一貫校に編入しました。自己紹介の時に、好きなものを聞かれ、彼は反射的に「イス」と答えてしまい、「イス男」として学年で知られるようになってしまいました。しかし、真はスラックスをはいた少女、早川梨々に出会いました。イスが好きだなんていう同級生はいないと思っていた真でしたが、梨々は自宅がイスの会社で、自身でもイスを作っているというイス好きでした。デザイナーを目指す真と、モデル（デザイナーのイメージを実現する人）を目指す梨々が手を組み、元イス職人の真のおじいちゃんを味方に、学生全国チェアデザインコンペに応募することに。前代未聞の中学生参加者である二人だが、結果はどうなるのでしょうか？

最初は目立たないように、怒られないように生活していた真が、学年で唯一の女子でスラックスであり、自分の意見をはっきりと伝える梨々と出会い、自分の

父親に自分の意見を言い、自分の将来のために勉強するようになりました。人に意見することは難しいですが、このような出会いがあれば、少しは自分の意見も伝えられるようになるかなと、この本で勇気をもらえました。

『床下の小人たち』

メアリー・ノートン 作 林容吉 訳 岩波書店

この本の名前をみただけではピンとこない人もいるかもしれません。皆さんの中には、「借りぐらしのアリエッティ」の映画を知っている人も多いと思いますが、これはその原作本です。映画とは設定が少し違うので、初めて作品にふれる人も、映画の内容を知っている人も楽しめると思います。

主人公のアリエッティ クロック（時計の下に住んでいるので苗字が「クロック」だということを知っていました？）とその両親、ポッドとホミリーは、とある屋敷の床下でひっそりと人間達から必要な物を「借りて」暮らしています。食料、切手、燃料、そして名前まで全て人間達から借りることで生活を成り立たせています。この本の中に登場するアリエッティの家の描写は細やかで、読者の想像力をかき立ててくれます。

ある日、一家の大黒柱でアリエッティの父親のポッドは、借りに行った先でひとりの男の子に姿を見られてしまいます。小人達は人間に見られることを何よりも恐れ、そのために命を落としたり、引っ越さなくてはいけなくなったりした例がいくつもあります。

しかし、主人公のアリエッティは外の世界への強いあこがれを持っており、ポッドが見られた後、初めて借りにでかけたときは今まであこがれていた外の世界にすっかり舞い上がってしまいます。

ところが、うっかりポッドを見てしまった男の子に自分の姿を見られてしまいます。

アリエッティは、男の子と最初はお互いの価値観の違いなど、かみ合わないことが多かったものの、しだいに、打ち解け、小人の仲間であるおじさんに手紙を書いて男の子に届けてもらい、自分は男の子に字を教えるという関係を築いていきますが、このことが一家に大事件を起こしてしまいます。

物語のラスト、男の子と別れたアリエッティの一家の行方について男の子の姉であるメイお婆さんが、アリエッティたちは野原で生き延びていた、という話をしたときは、この作品の持つ、ゆったりとした優しさを感じることができず。

ぜひ、コロナ禍で少し憂鬱な日々を送っているなら、小人たちのスリリングで、ワクワクする冒険を楽しんでみてはどうでしょうか。

『君が夏を走らせる』

瀬尾まいこ 著 新潮社

高校2年生の不良少年がこの夏、1歳の女の子のベビーシッターになる。主人公・大田はいわゆる不良少年。大田は小学校時代から学校の授業をまともに受けず、タバコを吸い、髪を染め、教師に反抗してばかり。しかし、小さいころから走りだけは速く、大田は中学3年生のときに、人数不足だった陸上部の駅伝のブロック大会参加のために汗だくになりながらも夢中で走り、活躍しました。しかし、駅伝大会が終わってからようやく頑張って取り組んだ高校受験は失敗し、何とか入った高校では耳に2つも穴をあけ、だらしない格好をしてふらふらと好きなことをして過ごしていました。そんなある日、大田は先輩から「バイトしないか」という電話を受け、迷った末、その先輩の娘である鈴香のベビーシッターをすることになります。その先輩には3歳年上の奥さんがいて、その奥さんが二人目の子どもを妊娠し入院している1ヶ月ほどの間、その先輩が仕事から帰ってくるまで鈴香の面倒を見てくれる人を探していました。しかし、頼れる人や

親戚などがおらず、後輩である大田にベビーシッターをしてもらうことにしたのです。

初日は昼まで三時間程度の朝九時から、大田は鈴香の面倒を見ることになります。しかし、大田は先輩が家に帰ってくるまでの間にどのように鈴香の面倒を見ればいいのかよく分かりません。鈴香は突然、見知らぬ男と二人きりになり、泣きやんでくれません。鈴香をあやすためのシールも DVD もビスコも効き目はなく、大田は途方に暮れてしまいます。

翌日、大田は少しだけ鈴香に慣れ親しみますが、レトルト食品の屋ごはんは全く食べてくれず、大田はそのパッケージをヒントにあることに気が付きます。このアルバイトが始まってから数日たち、鈴香も大田に慣れてきました。母子家庭に育ち、昔からよく料理をしてきた大田は、鈴香はレトルト食品が好きではないことに気が付き、鈴香には何を作ってあげれば良いだろうと考えて鈴香のために日々色々な料理を作っていきます。

そして、16歳大田の公園デビュー、ママ友との会話、不良の多い大田の通う高校で1人サックスを吹いている少女との出会いなども通じて、不良少年大田はこの夏どのように変わっていくのか、鈴香は大田のベビーシッターが始まってからの1ヶ月、どのように成長するのか。ぜひ読んでみてください。

ちなみに中学生時代、駅伝走者として仲間と共にブロック大会から県大会を目指す大田のことを、前作、「あと少し、もう少し」で見ることができます。こちらは1区から6区にかけて、あなた自身も走っているかのように読むことができるのではないのでしょうか。

大田の多くの出会いと別れ、あなたもそんな大田たちのことを応援していただけませんか？

共同編集者のつぶやき

～編集後記に代えて～

すっかりリモート編集がおなじみになってきたこの頃です。春は出会いと別れの季節ですね。読者のみなさんも、わくわくするような本に出会えますように！

- ①ペンネーム
- ②最近の至福の時間は？
- ③食べてみたい、本の中の食べ物
- ④本を読むお気に入りの場所

- ①ひまわり
- ②お風呂でアイス
- ③暗記パン（藤子・F・不二雄／作 小学館『ドラえもん』シリーズより）
高校2年も後半、切実に食べたい（；∀；）
- ④自分の部屋のベッドの上

- ①あさぎ
- ②寒い日に毛布にくるまること
- ③ナルニア国物語『ライオンと魔女』（C.S.ルイス／作 岩波書店）のプリン
（原文ではターキッシュデライトという外国のお菓子らしいです）
- ④家のソファが多いです

- ①しい
- ②布団でごろごろしているとき、好物をたくさん食べているとき
- ③『ぐりとぐら』（中川李枝子／作 山脇百合子／絵 福音館書店）に出てくるカステラ
- ④布団の中

- ①りほ
- ②テレビの録画を観ること、本やマンガをゆっくり読むこと
- ③『魔女の宅急便』（角野栄子／作 徳間書店）シリーズでキキが作ったスープ
- ④自分のベッドの上

- ①しほ
- ②ひとくちチョコを食べる時間
- ③『小説アナと雪の女王 影のひそむ森』（ベンコー／著 KADOKAWA）よりココア。
悪夢を見た後にアナが飲んでいていいな～と思いました。
- ④自分のベッドの上。枕をひじの下にしいて読んでいます。少し高い位置にベッドがあって、下に机が置いてあるので眠くなるとそこに本を置いて、99%くらいはそのまま寝てしまいます。